

光 אור についての聖書的考察

אור は「光」という意味で旧約聖書では120回使用されています。今回は、ひとつの書で1回しか使用されていない箇所を道先案内人として考察してみます。

- ・出エジプト記10章23節
- ・Ⅱ列王記7章9節
- ・ネヘミヤ記8章3節
- ・哀歌3章2節
- ・ホセア書6章5節
- ・ゼパニヤ書3章5節

1. 出エジプト記10章23節

三日間、だれも互いに見ることも、自分の場所から立つこともできなかった。しかしイスラエル人の住む所には光があった。

מוֹשֵׁב	ב	אור	היה	יִשְׂרָאֵל	בֵּן	כָּל
住む所、集い		光	ある	イスラエル	子孫、メンバー	全部、みんな

イスラエルの集いには、メンバー全員に光があった。

このようにも訳すことができます。「光の当てられたイスラエルの集い」はエクレシア、「教会」と考えることも可能です。今、私たちは「イスラエル」という言葉を深く考える時代に生きていると言えます。（金聖圭師 イスラエルの回復と教会①②参照）

ヨハネの福音書1章45節から、ナタナエルという人物が登場します。イエシュアに「これこそ、ほんとうのイスラエル人だ。彼のうちには偽りがない。（ヨハネの福音書1・47）」と言われる人物です。

「ほんとうのイスラエル」 אֱמֶת エメト（女性名詞）確実性、安定、誠実、真実
副詞として、ほんとうである、忠実に（語る）

「彼のうちには偽りがない」 רָמָה ラーマー 欺く 同じスペルで女性名詞として、（神々を祭った）高台、という意味があります。

ほんとうのイスラエル、確実なイスラエル、安定した、誠実な、真実な、そして忠実に語るイスラエル。（神々を祭る）高台をもっていない人。ナタナエルはそういう信仰者の象徴と言えると思います。

また、大患難時代の後の「真に回心したイスラエル」、そして「新しいエルサレム」での神の民、とも言えます。

創世記 1 章 3 節

אֱלֹהִים אָמַר וַיְהִי אֵרָא וַיֵּרָא אֱלֹהִים אֶת-הָאֵרָא וַיֵּרָא אֱלֹהִים אֶת-הָאֵרָא וַיֵּרָא אֱלֹהִים אֶת-הָאֵרָא וַיֵּרָא אֱלֹהִים אֶת-הָאֵרָא

光 ある 光 あれよ エローヒーム 言う

神は仰せられた。「光があれ。」すると光があった。

出エジプト記 10 章 23 節とリンクさせて考察すると、「光」は神のマスタープランの最終目的である「新しいエルサレム」につながる「光」と言えます。

2. II 列王記 7 章 9 節

彼らは話し合って言った。「私たちのしていることは正しくない。きょうは、良い知らせの日なのに、私たちはためらっている。もし明け方まで待っていたら、私たちは罰を受けるだろう。さあ、行って、王の家に知らせよう。」

חכה עד אור ה בקר

朝、翌日、明日 光 まで 待つ、待ち望む、ひまどる

「明け方まで待つ」のヘブル語の中に「光の朝を待ち望む」という意味が隠れています。聖書の言う「明け方」は「主の再臨」です。「良い知らせ」を告げることをためらってはいけません。「ほんとうのイスラエル」は「神のトーヴを忠実に語る人」です。主の再臨（携挙）は盗人のようにやってくるのだから、みことばを紐解く賜物を与えられた人たちはひまどってはいけません。

II ペテロの手紙 1 - 19

また、私たちは、さらに確かな預言のみことばを持っています。夜明けとなって、明けの明星があなたがたの心の中に上るまでは、暗い所を照らすともしびとして、それに目を留めているとよいのです。

使徒ペテロは地上における自分の働きが終わりに近づいているのを自覚し、自分と同じ

信仰を受けた人々を励ますためにこのような手紙を書き送りました。

3. ネヘミヤ記 8 章 3 節

水の門の前の広場で、夜明けから真昼まで、男や女で理解できる人たちの前で、これを朗読した。民はみな、律法の書に耳を傾けた。

I テサロニケ 5 章 5 節

あなたがたはみな、光の子ども、昼の子どもだからです。私たちは、夜や暗やみの者ではありません。

この聖句とリンクします。

「男や女で理解できる人たち」とは、I テサロニケ 5 章 5 節の「光の子供、昼の子ども」と言えます。ですからネヘミヤ記 8 章 3 節「夜明けから真昼まで」を「光の子ども、真昼の子ども」として律法の書に耳を傾けた、と理解してみました。

ネヘミヤ記もテサロニケ第一、第二の手紙も霊的覚醒について語っています。

ネヘミヤ記 8 章 8 節

彼らが神の律法の書をはっきりと読んで説明したので、民は読まれたことを理解した。

霊的覚醒は自然発生ではありません。神のマスタープランという意味でのトーラーを「はっきりと読んで説明」してくれる人が必要です。テサロニケの手紙で言うところの「あなたがたの間で労苦し、主にあつてあなたがたを指導（5 章 1 2 節）」している人々のことです。そういう人たちがいなければ、「光の子ども、昼の子ども」は生まれません。講壇に上る人はひまどってはいけないのです。「光の子ども、昼の子ども」にならないければ「新しいエルサレム」に入ることができないからです。

4. 哀歌 3 章 2 節

主は私を連れ去って、光のないやみを歩ませ、

אור לא ו חֹשֶׁךְ הֵלַךְ ו נהג אֶת

光 ない 闇、秘密の場所 歩む 導く、御させる

「光のない秘密の場所」、おそらく主との親密な関係を築く場所であり、そこに導かれ歩

むということを行っていると理解します。創世記1章2節「地は茫漠として何もなかった。やみが大水の上にあり、神の霊が水の上を動いていた。」ここに神は「光があれ」と命じました。「光のないやみを歩む」とは「光があれ」と言う神の声を聞くところと言える気がします。

5. ホセア書6章5節

それゆえ、わたしは預言者たちによって、彼らを切り倒し、わたしの口のことばで彼らを殺す。わたしのさばきは光のように現れる。

יֵצֵא אֹרֶךְ מִשְׁפָּט

前進する 光 ミシュパート

(神の) ミシュパートは光のように前進する

イスラエルに対する「刈り入れの時」の預言ですが「光のように」を肯定的に受け止めてもいいように思えてきました。口語訳は「わがさばきは現れ出る光のようだ。」です。イスラエルへの刈り入れは「繁栄を元どおりにする」ための神の「光」です。

6. ゼパニヤ書3章5節

主は、その町の中にあって正しく、不正を行わない。朝ごとに、ご自分の公義を残らず明るみに示す。しかし、不正をする者は恥を知らない。

אֹרֶךְ לִנְתֹן מִשְׁפָּט בְּקָרֶב בְּקָרֶב

光 与える、当てる ミシュパート 朝 朝

荒廃したエルサレム、しかし主もまたその町の中におられます。イスラエルが唯一の神との一夫一妻制の関係を維持するという約束を無視したにもかかわらず、主はご自身の民に献身し続けられます。彼らがもはや主を認めなくても、主は彼らのまさにその首都におられます。そして、朝毎にミシュパートに光を当てておられるのです。状況がどのように見えても、前進しているのです。ここは、以下の聖句とリンクします。

哀歌 3-22、23 節

22 私たちが滅びうせなかったのは、【主】の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。

23 それは朝ごとに新しい。「あなたの真実は力強い。」

אֱמוּנָה

真実、
(永遠の) 職責

רָבָה

大きくなる
育てる

בֹּקֶר

朝
(原文、複数形)

ל

חָדָשׁ

新しくする、更新する

朝毎に、真実は育てられ、更新されます。霊的覚醒です。

瞑想を終えて

אור 「光」は創世記から「新しいエルサレム」まで、「真のイスラエル」を照らし続けています。それはまるで「新しいエルサレム」のようだと感じました。

ゼカリヤ書 14 章 6、7 節

6 その日には、光も、寒さも、霜もなくなる。

7 これはただ一つの日であって、これは【主】に知られている。昼も夜もない。夕暮れ時に、光がある。

新しいエルサレムでは主ご自身が「光」です。

出エジプト記 10 章 23 節

三日間、だれも互いに見ることも、自分の場所から立つこともできなかった。しかしイスラエル人の住む所には光があった。

光を当てられたイスラエルの集い、それは霊的に覚醒された信仰者であり、その集合体である主の花嫁としての「教会」と言えます。「ほんとうのイスラエル」「ほんとうの信仰者」「ほんとうの教会」は「光の子ども、真昼の子ども」であり、神のマスタープランという意味でのトーラーを「はっきりと読んで説明」できる人、また、その集合体です。神のミシュパートは光のように前進しています。乗り遅れてはいけません。

2015年10月26日 西川 徳子